

## エゼキエル書8章7-12節 「見ておられる神」

### 1A 誤った神観

1B 「主は見ておられない」

2B 「主は見捨てられた」

### 2A 誤った神観の結末

1B 抑えられない欲望

2B 心の欺き

### 3A 全てを見る神

1B 隠れたことによる裁き

2B 心の一新と洗い

## 本文

エゼキエル書8章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは前回で7章まで来ました。午後礼拝で8章と9章を学びます。8章から11章までは、エゼキエル書全体の中でとても大事な箇所になりますが、神の栄光がエルサレムの神殿から離れるという衝撃的な出来事です。イスラエルが荒野の旅をしている時、主が、約束の地に連れて行かせるが、わたし自身が一緒に行かないと言われたとき、モーセは、「もし、あなたご自身がいっしょにおいでにならないなら、私たちをここから上らせないでください。(出エジプト 33:15)」と言いました。主と一緒においでにならない約束の地、また主と一緒におられない神殿は、考えられません。主イエス様がおられない教会は、どうでしょうか？ 実に、ラオデキヤの教会はそうなっていましたね、主は教会の外に立って、その戸を叩いておられました。教会がイエス様をそこから締め出していたのです。

そのように、主の栄光が神殿から離れてしまうところを読みますが、主がそこまで強い憤りを抱いていられる原因がありました。それを8章で読みます。他のユダヤ人と共に、離散の地バビロンにいたエゼキエルは、神の御霊によってエルサレムまで連れて行かれます。そして、そこで見たのは、おぞましい偶像礼拝でした。8章7節から12節までを読みます。「7 それから、この方は私を庭の入口に連れて行った。私が見ると、壁に一つの穴があった。8 この方は私に仰せられた。「人の子よ。さあ、壁に穴をあけて通り抜けよ。」私が壁に穴をあけて通り抜けると、一つの入口があった。9 この方は私に仰せられた。「はいつて行き、彼らがそこでしている悪い忌みきらうべきことを見よ。」10 私がはいつて行って見ると、なんと、はうものや忌むべき獣のあらゆる像や、イスラエルの家のすべての偶像が、回りの壁一面に彫られていた。11 また、イスラエルの家の七十人の長老が、その前に立っており、その中にはシャファンの子ヤアザヌヤも立っていて、彼らはみなその手に香炉を持ち、その香の濃い雲が立ち上っていた。12 この方は私に仰せられた。「人の子よ。あなたは、イスラエルの家の長老たちがおのおの、暗い所、その石像の部屋で行なっていることを見たか。彼らは、『主は私たちを見ておられない。主はこの国を見捨てられた。』と言っている。」

主は見ておられない、主は見捨てたから、と嘯いて、それで自分たちのしたいことをやり放題やっていた、ということです。ある国での出来事です、私が他の学生たちと授業を取っていました。試験になりましたが、その先生が教室から出て行った途端、隣の学生たちと話し始め、なんと協力して設問に解答していくではないですか！どうせ、先生は見えていないから、ということでしょう。私はしっかりと、その先生に後で電話して、それでカンニングをみんなですしていたことを伝えました。

しかし、私たちは霊的に、このことをしてしまいます。今、エゼキエルは庭の入口のところで、壁の穴を見つけ、そこから入るように言われました。壁の中に隠れた部屋がありました。すると、なんと、悪い忌むべき獣の像が、イスラエルが拝んでいるあらゆる偶像が掘られていました。しかも、そこにイスラエルを代表する長老七十人が立っていたのです。非常に神を畏れ敬うシャファンの息子ヤアザヌヤまでいます。そして、これらの偶像に香を焚いていたのです。私たちが、当時の発掘された偶像を見たら、なんでこんなものを拝んでいたのか？と首を傾げたくなるようなものばかりです。しかし、奇妙なもの、不可解なものに、不自然な魅力を人々は抱きます。あまりにも奇怪な形をしているのですが、しかし、それに引き込まれる力を持っています。そしてそれに引き込まれたら、あらゆる情欲や貪りを犯してしまう、という経緯があります。それらの偶像には、性的な倒錯が伴っています。ですから当然望まぬ妊娠をするのですが、そのための偶像モレクもありました。

改めて、日本にもある風習を見れば、あまりにもいかがわしい偶像があります。道祖伸や陰陽石などにまつわる儀式、そして毎年の夏に行われる盆踊りにも、元を正せば、恐ろしい悪習が背景にあります。そして水子地蔵はまさに、モレク崇拝と重なる意味合いがあります。今でこそ、意味も知らずに行なっている慣わしの中に、それらの像の中に、人間が隠れて行なっている、異様なまでに、制限なしに貪る、暗やみの行ないがあります。そして今でもそうではないでしょうか。巨大な権力の争いにしろ、富にしろ、知識にしろ、娯楽や快樂にしても、それらを冷静に見れば、あまりにも滑稽であり、異常で奇怪なのですが、しかしだからこそ、人々を魅了し、好奇心によって引き寄せられ、虜にされている姿を見ます。

そして問題は、神の宮の中で、しかもイスラエルの長老たちが、そうした偶像と忌まわしい行ないの虜にされていたのです。これは、「外面では霊的に見えるけれども、内側が汚れていっぱいな姿」を現しています。イエス様は、「悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。(マタイ 16:4)」と言われました。しかし、当時、ユダヤ人は偶像を造ってはいませんでした。しかし、心には偶像でいっぱいだったのです。パリサイ人と律法学者にこのように責められました。「23:25 忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。」心は強奪、そして放縦でいっぱいであったということです。これがすなわち霊的な姦淫、偶像礼拝と同じであることをイエス様は語られたのです。

## 1A 誤った神観

それでは本文に戻り、再び8章12節にある彼らの言葉に注目してみたいと思います。「**彼らは、**

『主は私たちを見ておられない。主はこの国を見捨てられた。』と言っている。」彼らの中に、誤った神観がありました。神がご自身を啓示されたとおりに信じたのではなく、自分勝手に考え出した神の姿です。一つは、主は自分たちを見ておられないということ。もう一つは、主が自分たちの国を既に見捨てておられるということ、です。

### 1B 「主は見ておられない」

初めの、主が見ておられないということですが、聖書は何度となく、主が全てのことを見ておられ、どんな心の動きであっても、それもじっくりと見ておられることを、はっきりと書いています。(詩篇 139:1-4 等) 私たち人間は、悪いことをしている時に、「主は、このことについては見ておられない」と勝手に思い込みます。しかし、ノアの時代、なぜ主が洪水で地上の生き物を消し去られたのか、それは人々の悪い思いを主が見ておられたからです。「創世 6:5 主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」そして、ヘブル書 4章 13節には、「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」とあるのです。その思い一つ一つに対して、責任を持っています。そして私たちは、どうしても目で見えるところで物事を判断していますが、主は違います。預言者サムエルにこう言われました。「1サムエル 16:7 人はうわべを見るが、主は心を見る。」そして、その心を主が見ておられたダビデは、息子ソロモンにこう言いました。「1歴代 28:9 主はすべての心を探り、すべての思いの向かうところを読み取られるからである。」

したがって、主がエゼキエルに、神殿の壁の中の隠れた部屋で彼らが忌まわしいことを行っていたことを見せになったように、私たちが心に描いていること、思いの向かっていることをすべて知っておられるのです。

それにも関わらず、人がなぜ神は見ておられないと思ひ込むことができるのか？と言いますと、それはまず、人には隠せているからでしょう。普段から人から隠しながら生活していて、それを見せないことに成功しているため、その考えを神にも投影しているからでしょう。そのことを預言者イザヤが、「陶器師を粘土と同じようにみなしている」と言って説明しています。「29:15-16 ああ。主に自分のはかりごとを深く隠す者たち。彼らはやみの中で事を行ない、そして言う。「だれが、私たちを見ていよう。だれが、私たちを知っていよう。」と。ああ、あなたがたは、物をさかさに考えている。陶器師を粘土と同じにみなしてよかろうか。造られた者が、それを造った者に、「彼は私を造らなかつた。」と言い、陶器が陶器師に、「彼はわからずやだ。」と言えようか。」

そしてもう一つは、自分が悪いことを計っていても、それで神が自分を止めることなく、また罰を与えることがないので、神は自分のしていることを知らないとも思っています。つまり、神がその悪に対して正しい怒りを持っておられるけれども、それを敢えて抑えておられる、つまり忍耐しておられることを無視しているからです。「ローマ 2:4-5 それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導く

ことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。」主が心を痛めて見ておられるのに、そして、正しい裁きを下すことを、悔い改めるために抑えて待っておられるのに、それをかえって自分のしていることを黙認しているのだと思って、それで悪事を続けるのです。

## 2B 「主は見捨てられた」

次に、「**主はこの国を見捨てられた。**」という部分を考えてみましょう。これは言い換えれば、「主なる神は存在するが、私たちの国に関わったり、介在してはおられない。」というものです。モーセに律法が与えられていたあの時期は、既に 850 年ぐらい経っています。かつて主は、そのようにしてイスラエルの民とその国に介在しておられたが、今は、バビロンによって捕え移された者たちもいるし、私たちのことには関係を持っておられないのだ、と考えているのです。

このような考えは、実に多くの人々が考えているものではないかと思います。西洋において、「理神論」というものがあります。それは、「神を世界・天地の創造者とはするが、世界を支配する人格的超越存在とは認めず、従って奇跡・預言・啓示などを否定する立場。」立場です。「いったん創造された以上、世界はみずからの法則に従ってその働きを続けるとする。」とします<sup>1</sup>。神はいるのではないかと思う。けれども、人間と同じように人格を持っているのだろうか。また、私たちの現実の生活に、現実に関わっているということはないだろう。そこまで深く関わっていることは、ないであろう。奇跡が特に起こっているわけでないから、神は関わっていないとします。理神論と呼ばずしても、人々の思いには似たような考えがあるでしょう。

しかし、聖書は、私たちの生活の細かいことにまで、全てに介入されている神を啓示しています。神は宇宙全体を支配されている方ではありますが、このような小さき者を心に留めておられ、ここ教会に到着する時までの全てについて知っておられます。どんな小さな事柄でさえ、主の目から離れているものは何一つありません。ダビデは、理神論のような神を信じていませんでした。こう言いました。「詩篇 8:3-4 あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。」そしてイエス様は、鳥でさえも、それが生きることができるよう養っておられることを語られました。「マタイ 6:26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。」

ところが、私たち信者の心や思いが、二つ棲み分けをしてしまっている時があります。神についての知識においては、神が人格を持ち、私たちの生活に関わっておられることを認めています。と

---

<sup>1</sup>「デジタル大辞泉」より

ころが実際の日々の生活においては、「主は大まかなことでは関わっているのかもしれないけれども、聖書の時代のように深く関わっていない。あとは、自然の法則があって、私も自分の努力で動いているだけだ。」と考えている時もあるのです。これは怖いことですが、信仰について、「現実もあるのだ」とする棲み分けをしてしまいます。

私も、そういう思いがやってくることがあります。けれども、そのような考えを神が打ちのめしてくださるのが、祈りです。祈り会で祈ります。そして教会で祈ってほしいと頼まれたことを、祈ります。祈りの奉仕ですばらしいことは、その人のために何かをやったことではなく、自分自身が祝福されることです。自分の知恵や力で何もしていないのに、主が私たちの父として、その子供たちの願いを聞いてくださることを、具体的に知ることができるからです。こんな小さな私たちに、神は深い関心を寄せておられ、私たちの小さき祈りを聞き、それを御心に従ってかなえたいと待っておられることが分かるのです。まさに、鳥を養われる神は、ましてや私たちの生活、食べること、着ること、住むことに関わっておられるのです。

## **2A 誤った神観の結末**

### **1B 抑えられない欲望**

しかし、もしエルサレムにいる人々のように、私たちが誤った神観を持っているとしたらどうなってしまうでしょうか？神は見ておられない。そして、神は遠くから見ておられて、私たちを勝手にやらせておられるとしたらどうでしょうか？それは、先に詩篇 10 篇を読んだ通りに、人々の心が欲望に満ち、抑えられないものになります。心の欲望を語り、高慢を表し、人を傷つけたとしても、心の中ではこう語っているのです。「神は忘れている。顔を隠している。彼は決して見はしないのだ。(11 節)」

そうです、主が見ておられないということであれば、欲望が抑えられることなく、貪りでてくることになります。ここ 8 章においては、祭壇の門の入口に、妬みの偶像がありました。それだけでなく、壁の中の隠れた部屋に、七十人の長老が忌まわしい像に香を焚いています。さらに、北の門の入口には、女たちがタンムズというバビロンの神に泣きながら祈っていました。そして神殿の本堂と祭壇の間で、おそらく祭司でしょう、二十五人がなんと東の方を向いて、太陽を拝んでいたのです。一度、偶像を心に許したら、留まることを知らなかったのです。そして、貪っているうちに、神はおられない、神は見捨てたと嘯っていたのです。

### **2B 心の欺き**

そして恐ろしいのは、人の心は欺いてしまうことです。「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。(エレミヤ 17:9)」人間の心は、人間の体と似ています。例えば、海で遊んでいる時に膝をすりむいても、意外と気にならないのに、海から上がると、非常に痛くなってくる、ということがありますね。遊んでいて楽しいから、感情が高まっていて、痛みを忘れていたのです。体が、「その傷はなかったことにしよう」とする傾向があるからです。これと心は似て

います。心に傷を深く負ったら、その時はなかったことにしてしまい、感じないようにしてしまいます。けれども、じわじわと心が酷く傷ついたことが出てきます。これも、正常な生理的な反応です。

しかし、良心についても同じような作用があります。そしてこれは、とても危険です。自分が悪いことをすると、その悪いことに初めは激しい良心の痛みを感じるのですが、それでもこの世で生きていくために、その痛みを感じさせないようにしてしまうのです。しかし、御霊によって時々、語られることがあります。その時に、とてつもない恐ろしさを感じます。罪から来る報酬は死ですから、自分のしていることに対して、神の怒りがあることを知るので。ところが、もはやそれはなかったことにしようと思ひ聞かせて、それで日常の生活に戻るのです。その中で、自分自身を欺くようになるのです。時に強い良心の呵責を抱いても、感じていない時が正常なのだと思ひ込むのです。しかし本当は、その反対です。血が体から出ているのに、痛くないから出血して、大量の失血で死んでしまう、ということが起こるからです。

### **3A 全てを見る神**

#### **1B 隠れたことによる裁き**

それで、主は見えていない、主は見捨てたと思ひ込むことができるのですが、良心はそうではない、そうではないと伝え、一つの真理を教えます。それは、「主はあなたの隠れていたことについて、公正に裁かれる」ということであります。「ローマ 2:16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。」福音は、私たちの表面的な行ないを裁きません。人の本当の有様、その深いところにしたがって裁きます。そして、こうも書いてあります。「1コリント 4:5 ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。」主が来られる時に、全ての隠れたことが明るみに出されます。主のものとしてされている者は、称賛が届きます。しかし、そうでない者は隠れたことにしたがって、裁かれます。全ての人は、その心で思っていることも含めて、全てが正しい裁き主、神の前で申し開きをするのです。

#### **2B 心の一新と洗い**

では、私たちはどうすればよいのでしょうか？心と思いで犯している罪について、どうしたら洗い清められることができるのでしょうか？私たちの宗教には、「穢れを清める」という概念があります。それは、掃除をしたり、お風呂に入ったり、塩でお祓いすることもできるものです。しかし、それで私たちの思いは清められるのでしょうか？いいえ、違いますね。この汚れは根本的なものです。私たちの心からわんさか出てくるものです。「マルコ 7:21-23 内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」とイエス様は言われました。

私たちはまず、自分が思いの中で犯している罪も含めて、すべてを主の前に明らかにするという事です。偽善を悔い改めます。表面的なことだけを罪を言い表していた、そして事の本質については、そのまま放置していた。パリサイ人ようになっていた、ということを悔い改めます。そうすれば、主はその良心から私たちを清めることができになります。動物の流す血によってではなく、ましてや、お祓いによって清められるのではなく、聖なる神の御子キリストご自身が身代わりに流して下さった血によって、清められるからです。「ヘブル 9:14 まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におさげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とする事でしょう。」キリストの血が、私たちの心に注がれて、その良心から清めてくださいます。それだけでなく、御霊が注がれます。私たちの外側ではなく、神の御霊が内側に入ってきてくださり、心を一新して下さるのです。「テトス 3:4-5 しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。」